會 厭 軟 骨 囊 腫 ニ 就 テ

T. Sunada: Über die Epiglottiscyste.

名古屋醫科大學耳鼻咽喉科教室 (主任 阿久根教授)
名古屋市外下之一色町 漁業組合共愛病院耳鼻咽喉科
醫 學 士 砂 田 知 一

本文ノ大要ハ昭和10年2月24日、第45回大日本耳鼻咽喉科會名古屋地方會ニ於テ發表セリ。

内 容 抄 録

69歳ノ男子ノ會厭軟骨舌面ニ見タル大サ鳩卵大。内容ハ濃厚粘稠。稍臭氣アル糜粥ニ類スル物質ニシテ恰モ「クリーム」様ノ囊腫ニシテ組織學的ニ内、中、外ノ3層ヨリナル壁ヲ有シ。内、外2層ハ共重ニ層扁平上皮ヨリナリタルモノニシテ。文献報告ヨリ先天性會厭囊腫ト思惟サル、モノナリ。一般喉頭「チステ」ハ喉頭良性腫瘍ニ比シ遙ニ少シトセラルモ既ニ可成リノ報告例ヲ見ル。而シテ夫レガ發生

原因。種類 發生部位等ニ關シテ精細ナル統計的觀察ノモトニ既ニ報告サレタルモ。先天性囊腫ニ關スルモノハ未ダ僅少ナルモノナリ。依テ余ハ一般喉頭「チステ」ニ關スル大略ヲ述ベルト同時ニ。先天性囊腫ニ關スル諸家ノ報告例ト余ガ自驗例ヲ比シ稍々興味ヲ感ジタルヲ以テ茲ニ報告セントスルモノナリ。

目 次

1) 緒 言	4) 考 案
2) 自 驗 例	5) 結 論
3) 總 括	附圖並ニ文献

緒 言

喉頭囊腫ハ Jurasz ニ依レバ喉頭ニ發生スル良性腫瘍即チ乳嘴腫及ビ纖維腫等ニ比シテ遙ニ少シトセラル、モ既ニ可成リ多數ノ報告アリ。Beschornier ハ 693 例ノ喉頭「ポリープ」ヲ集メ 45 例ノ囊腫ヲ得タリ。其他 Jurasz ハ 192 例ノ喉頭良性腫瘍中 14 例。Fauvel ハ 350 例中 3 例ヲ。Massey ハ 200 例中 13 例ヲ。Mackenzie ハ 100 例中 2 例ノ囊腫ヲ集メタリ。反之 Schwartz ハ 138 例。Moure ハ 117 例。Ulrich ハ 196 例ノ多數ノ囊腫ヲ集メ得タリ。而シテ文献

上最モ多ク見ラル、モノハ會厭軟骨囊腫ニシテ然モ其舌面ニ發生スルモノ最モ多シ。本邦ニ於テモ明治 33 年金杉氏ノ報告記載以來多數ノ報告例ヲ見ル。會厭軟骨囊腫ハ通常圓形ノ膨隆トシテ來タリ。大サハ種々ニシテ通常帽針頭大ヨリ鳩卵大或ハ鶏卵大ニ達スル事アリ。形ハ多ク球形或ハ橢圓形ニシテ色ハ帶赤色。増大スルニ從ヒ一般ニ灰白色ヲ帶ビ緊張スル事アリ。又波動性ヲ呈スル事アリ。表面平滑ニシテ表面血管ノ分枝狀ニ怒張スル事アリ。内容ハ種々ニシテ

水様透明。漿液或ハ粘液性透明又ハ潤濁スル事アリ。而シテ組織學上粘液腺ヨリ生ズル潑滲囊腫最モ多シトセル。サレド此種ノ外稀レナレドモ多ク橢圓形ヲ呈シ。淡紅灰白色又ハ黃色ヲ呈シ表面ニ怒張スル血管ノ游歩ヲ認メ而シテ被膜ハ通常厚クシテ濃厚鉛粥狀ノ内容ヲ有スル囊腫アリ。Chiari ハ此種ノモノヲ組織學上ヨリ先天性ノモノニシテ「アテロームチステ」ト云ヘリ。而シテ此如ク内容濃厚鉛粥樣物質ヲ滿セル Athromycyste 又ハ athromatige Cyste ニ類スルモノ Chiari, Glas, Kubler, 韓, 高島, 種村等諸士ノ報告ヲ見ルガ如ク内外文献上其記載ノ多キヲ見ズ。余ハ會厭軟骨舌面ニ發生セル所謂「アテローム樣チステ」ニ該當セル 1 例ニ遭遇シ。幸ニ組織學的並ニ化學的ニ檢索シ得タルヲ以テ。之ヲ茲ニ報告シ諸賢ノ御批判ヲ仰グモノナリ。

自 驗 例

患 者。69 歳ノ男。

家族歴。特記點ナシ。

既往症。昭和 9 年 7 月。特發性壞疽ニ罹患シ醫療ニヨリ治癒セル以外著變ナシ。煙草及ビ酒ハ多ク嗜好セズ。

現病歴。昭和 9 年 10 月頃。咽頭部ニ異物感アリ。嚥下作用ノ時特ニ増加ス。呼吸困難ヲ自覺セシ事ナシ。輕度ノ咽頭痛アルモ。咳嗽。喀痰ナシ。昭和 10 年 1 月來院ス。

全身所見。體格榮養中等度。胸部。腹部ニ著變ナシ。頸部淋巴腺腫脹ナシ。

局所所見。口腔粘膜尋常。口蓋扁桃腺腫脹セズ。咽頭粘膜ハ發赤。腫脹。濾胞増殖ヲ呈ス。喉頭ヲ檢スルニ會厭軟骨舌面ニ於テ稍々左側ニ偏シ比較的廣キ基底ヲ以テ發生セル表面平滑。

橢圓形鳩卵大ノ腫瘍アリ。表面血管分枝狀ニ走行シ。淡赤灰白黃色ニシテ舌根部ニ接觸ス。喉頭内部ノ粘膜ハ輕度ニ發赤シ。聲帶ニ著變ナク運動良シ。依テ喉頭鏡下ニ扁別用寒露係ヲ用ヒ。囊腫ノ大部分ヲ切除シ。他部ハ缺ニテ切除又ハ銳匙ニヨリ搔爬ス。囊腫ノ肉眼的所見トシテ壁ハ一般ニ薄ク不透明ニシテ淡黃灰白色ニシテ血管ノ分枝走行アリ。内容ハ粘稠「クリーム」樣ニシテ稍々惡臭ヲ帶ブ。毛髮等ノ混雜物ヲ見ズ。組織學的所見ハ壁ハ内。中。外ノ 3 層ヨリ成リ角外層及ビ内層ハ共ニ重層扁平上皮ヨリ成リ化ヲ認メズ。中層ハ粗ナル結締組織ニテ小血管ヲ有シ。淋巴球及ビ組織球アリ白血球ヲ認メズ。腺上皮。氈毛上皮。粘液腺。腺排泄管。淋巴管及ビ炎症ノ像ヲ認ムルコトヲ得ズ。内容物ハ脱落上皮及ビ構造不明ナル物質ヲ認ム。「コレステリン」結晶ヲ認メ得ザリシモ化學的檢査ニ於テ多量ノ中性脂肪及ビ少量ノ「コレステリン」ヲ證明セリ。

總 括

喉頭囊腫ノ發生部位ハ會厭軟骨最上位ヲ占ム。Beschoner ハ 31%。Ulrich ハ 49%。Schwartz ハ 44%。Moure 43% ヲ報告シ。而シテ Moure ハ 117 例中會厭軟骨 50 例。聲帶 45 例。モルガニー氏竇 8 例。披裂軟骨 4 例。披裂會厭靱帶 3 例。假聲帶 2 例。サントリー氏軟骨部 1 例及ビ喉頭ニ無關係ノ部位 4 例ヲ報告セリ。Ulrich ハ喉頭囊腫 126 例ヲ集メ。會厭軟骨ニ發生セシモノ 60 例。聲帶 50 例。モルガニー氏竇 8 例。披裂軟骨及ビ披裂會厭靱帶 8 例ナリト報告セリ。Hohmann ハ 2 ケ年ニ 12 例ノ喉頭囊腫ヲ發見シ其中會厭軟骨ニ來タレルモノ

5例、聲帶3例、假聲帶2例、披裂軟骨1例及ヒ甲狀骨ノ先天性囊腫ノ1例ヲ報告セリ。斯ノ如ク其好發部位ハ會厭軟骨ヲ第1ニシテ、第2ハ聲帶ノ游離縁、第3ハ會厭披裂皺襞ナリ。披裂軟骨、假聲帶及ヒ後壁等ヨリ發生スル事ハ極メテ稀レナリ。而シテ會厭軟骨囊腫ニアリテハ其舌面＝最モ多シ。Ulrichハ60例ノ囊腫中27例(45%)ガ舌面＝17例(29%)ガ會厭軟骨邊緣、6例(10%)ガ喉頭面＝、Mischkin＝依レバ98例ノ會厭軟骨囊腫中舌面49例(50%)、喉頭面10例(11%)、邊緣17例(19%)ナリト。多數ノ症例＝就テ其部位、成因並ニ組織學的所見ヲ明ニシタル報告例ハGlasノ16例アルノミニシテ氏ハ喉頭囊腫16例、會厭軟骨舌面ヨリ發生シタルモノ7例(淋巴囊腫2例、潑溜囊腫2例、先天性囊腫3例)、披裂會厭皺襞ヨリ發生シタルモノ2例(淋巴囊腫1例、畸形類以ノ囊腫1例)、聲唇1例(外傷性囊腫)、モルガニー氏竇4例(潑溜囊腫3例、先天性上皮囊腫1例)ヲ報告セリ。上記統計的觀察ニ依ルニ大部分ハ會厭軟骨＝發生シ、然モ其大半ハ會厭軟骨舌面＝來タルヲ知ル。

次ニ喉頭囊腫ノ種類＝就テハ明カナル統計ナキモ腺或ハ腺分泌管ノ閉塞潑溜ニヨル潑溜囊腫ノ最モ多キハ諸家ノ認ムル所ナリ。喉頭囊腫ハ其成因ヨリ種々區別サル。Luoysハ發生學的ニ總括シ、1)濾胞性囊腫(潑溜囊腫)、2)淋巴管性囊腫、3)先天性囊腫＝分テリ、GlasハChiariノ臨牀ニ於テ臨牀經驗ヲ基礎トシテ、1)上皮下又ハ上皮間粘液腺ヨリ生ズル潑溜囊腫、2)先天性囊腫、3)外傷性囊腫、4)淋巴囊腫ノ4種類＝分類セリ。Chiariハ聲帶囊腫＝就キ其成立ハ粘液腺ヨリ來タレル事ハ稀ニシ

テ寧ロ血管、淋巴管ノ擴張又ハ結締組織腔ノ凝液性浸潤ニヨリテ來タルト云ヘリ。種村氏ハ囊腫ノ發生學的研究＝際シ嚥＝其臨牀學的ノミ＝從ヒ之ヲ分類スル事不可能ナルノミナラズ組織學的ニ內壁上皮ノ性状其他ニ依リテ之ヲ精細検査スルモ之ヲ斷定スルノ域ニ達セザル事屢々ナリト云ヘリ。次ニ成因ニ關シテJuraszハ最モ多キ潑溜囊腫ノ成因ヲ炎症性及ビ非炎症性ノ2種ニ分テリ。炎症性トイフハ炎症ノ爲メ粘液腺＝囊腫擴張ノ動機ヲ與ヘ腺液ノ排泄障礙ヲ來タシテ遂ニ囊腫狀ニ變化シ又一面ニハ炎症性刺戟ニヨリ腺内ニ蓄積シタル上皮脱落ハ腺排泄管ノ一部ヲ閉鎖シテ囊腫形成ヲ促進ス。非炎症性ト云フハ全ク炎症性症狀ナクシテ或ル動機アリテ腺口ガ遮斷セラレ、爲メ腺管ガ擴張シテ囊腫狀變性ヲ來タセルモノナリ。殊ニ會厭軟骨舌面ニ於テハ食物ノ嚥下作用ニ依リ強力ナル壓力ヲ以テ食物ト相接觸スル故、時トシテハ口蓋扁桃腺窩ニ於ケルガ如ク小ナル食片ハ機械的ニ腺内ニ壓入セラレテ腺開口部ヲ閉鎖シ遂ニ囊腫ヲ形成スル可能性アル事ハ考ヘラルモ實際ニ於テ此種形成ハ比較的少キガ如シ。抑モ喉頭ニ於テ粘液腺及ビ漿液腺ノ存スル限リ其何處ニモ發生シ得ベキナリ。而シテ何故ニ會厭軟骨舌面ニ多キヤノ問題＝就テハ常ニ會厭軟骨舌面ハ最モ刺戟ヲ受ケ易キ位置ナルガ爲メ炎症ノ最モ屢々起ル故ナリト云フ。光吉氏ハ會厭軟骨面ニ潑溜囊腫多キ理由＝就テ解剖學的ニハJuraszガ云フガ如ク會厭軟骨舌分泌口ヲ有スル粘液腺ハ殆ンド無ク多クハ喉頭面ニ分泌口ヲ有スト。例外的ニ舌面ニ開口スル腺分泌管ガ機械的ニ閉塞セラルハコトハ潑溜囊腫ノ特ニ舌面ニ多キコトヲ説明スル事難シ。舌面ニ存スル腺ガ舌面ニ開口セズ喉

頭面＝開口スル場合ハ細長ナル分泌管ヲ有シ爲
＝此分泌管ハ長キ經過中炎症性變化＝遭遇スル
機會ノヨリ多ク、因ツテ潑溜囊腫ハ舌面＝最モ
發生シ易シト。又 Oppikofer 及ビ光吉氏ハ會
厭軟骨ノ喉頭面及ビ其他喉頭内ノ粘膜ハ鬆粗ナ
ル結締織＝乏シク軟骨面＝比較的密接＝附着セ
ル＝反シ會厭軟骨舌面及ビ舌根部、舌會厭皺襞
ハ粘膜下結締織甚ダ鬆粗ニシテ粘膜ト軟骨面ノ
關係割合＝緩疎ナリ。即チ此關係ヨリ舌面＝生
成セン潑溜囊腫ハ其他ノ面＝生ゼシモノヨリ大
＝發育シ易キ事モ與ツテ力アリト思惟スト。

先天性囊腫ハ Glas ＝依レバ胎生時＝於テ迷入
セル胚芽ヨリ發生セルモノ、鰓裂ヨリ發生セル
モノ、甲狀舌骨殘胎ヨリ發生セルモノ、3種＝
區別セリ。而シテ一次的＝發生スル先天性囊腫
ハ胎生時迷入胚芽ヨリ生ズルモノナリト云ヘ
リ。外傷性囊腫ハ食物攝取ノ際ノ外傷ヨリ起ル
コト多ク會厭軟骨舌面＝多シ。淋巴囊腫ハ淋巴
管ノ擴張＝ヨルモノニシテ炎症ノ經過中＝來タ
ル事多シ。Glas ＝ヨルト獨立的＝アルコト少
ク、多ク囊腫様＝變化セル Polyp ラ伴ツテ居
ル。此 Polyp ハ小量ノ内被細胞ヲ持ツタ廣イ
腔間ヲモチ、之ノ成因ハ淋巴腔ノ擴張デアル。
且ツ腺様組織ノアル様ナ所＝特＝發生ス。即チ
モルガニー氏竇或ハ會厭軟骨ノ後面＝多シ。

喉頭囊腫發生ノ年齡的關係ハ Ulrich ノ統計＝
依レバ孰レノ年齡＝モ發生スルモノナルモ、20
歳—50歳ノモノ＝多ク稀レ＝1歳半—73歳ノ者
＝之ヲ見ルト。Salmon ハ中年ノ男子＝多シト
云フ。其理由トシテ感冒、刺激性瓦斯ヲ吸入、
煙草等＝ヨル慢性喉頭炎＝斯カル機會多キ＝ヨ
ルト云フ。

性トノ關係＝關シテハ Ulrich ハ 107 例中男子

78 例(72.9%)、女子 29 例(27.11%)ナリシト。

職業的關係ハ明カナラズ。

症狀。喉頭囊腫ノ症狀ハ其位置並ニ大キサ＝
ヨル種々ニシテ、小サキモノハ其位置ガ聲帶＝
ナキ限り無症狀ナル事多シ。大ナル囊腫ハ嚥下
困難、異物感ヲ感ズル。囊腫ガ喉頭内部ニアル
中ハ呼吸困難ヲ生ジ、時トシテ窒息死ヲ起スコ
トモアル。聲帶自身ノ囊腫ハ必ズ嗄聲ヲ起シ、
呼吸困難ヲ起ス。

診斷。喉頭鏡＝依レバ診斷ハ一般＝容易ナ
リ。圓キ或ハ橢圓形ノ又ハ半圓形ノ又時トシテ
ハ柄ヲモツタ球形ノ腫瘍デ之ハ其診斷ハ容易デ
アル。

豫後。一般＝良好ニシテ Ulrich ハ 126 例ノ
統計的觀察＝於テ 2 例ガ死亡セルヲ報告ス。呼
吸困難、嗄聲、此症狀ハ適當ナル治療＝ヨリ例
外ナク治癒シ得ル。再發ハ不適當ナル治癒＝際
シテノミ見ラル、モノナリ。

治療。治療方針ハ出來ルダケ喉頭内デ行フモ
ノニシテ、窒息ノ恐レアル場合＝限り、氣管切
開ヲ施行セル後、喉頭内ヨリ囊腫ヲ摘出スル。
手術中血液又ハ分泌物ガ肺＝入り氣管枝肺炎ヲ
惹起スル危險ヲ豫防スル爲ニ、患者ノ位置ヲ斜
位＝スル事が大切ナリ。

考 案

竊ツテ余ガ症例ノ如ク「クリーム」様内容ヲ
存スルモノ、成因ハ何レ＝屬スベキカ。其病
歴、臨牀所見並ニ病理組織學的所見ヨリシテ
Glas ノ外傷性囊腫、淋巴囊腫＝該當セザル事ハ
明白ニシテ、其内容ヨリ入山氏ノ總括的「アテ
ローム様チステ」＝屬スベキモノナルモ、Glas
ノ記載セルガ如ク先天性ノモノナリヤ、又入山

氏ノ例ノ如ク潑溜囊腫＝一致スベキモノナリヤ。余ノ症例ノ如ク「クリーム」様ノモノ乃至鉛粥様或ハ Athrombrei トモ稱スベキ内容ヲ存スル囊腫＝對スル諸家ノ報告例ヲ見ルニ Kahler und Schmidt ハ 60 歳ノ會厭軟骨ニ發生セル梅毒大ノ囊腫ヲ經驗シタリシガ内容ハ乳酪様ニシテ、囊腫ハ重層扁平上皮ヨリ成ル内外 2 層ノ壁ヲ有シ其外層ハ會厭軟骨ヲ被フ扁平上皮ニ外ナラズ。兩層間ニハ多數ノ血管及ビ淋巴管ヲ交ユル鬆組ナル結締組織ヲ有シ。外壁ノ低部内壁ニ接シテ強力纖維網狀ヲナシテ走行シ。壁ニ於テ腺、内柱上皮ヲ認メズ。内容物ハ脱落上皮ヨリナリ「コレステリン」結晶ヲ認メズト。彼ハ之ヲ先天性ノモノトセリ。Chiari ハ内容 Athrombrei ナリシ 2 例ヲ Athromcyste トシテ先天性ニ迷入セル胚芽ヨリ發生セルモノトシ。Glas ハ同様ノ内容ヲ存スル囊腫ヲ athromatige Cyste トシ其成因ヲ先天性ノモノトセリ。然ルニ入山氏ハ内容灰白色鉛粥狀ニシテ恰モ「アテローム」様ヲ呈スルモノ 2 例ヲ觀察シ。其成因ハ粘液腺ノ分泌障礙ニヨリ生ジタル一種ノ潑溜囊腫トシ。從來考ヘタルガ如ク、「アテローム」様囊腫ハ常ニ必ズシモ先天性ニ非ラズト云ヘリ。而シテ斯ノ如キ内容ヲ有スルモノヲ臨牀上及ビ病理學上ヨリ「アテローム様チステ」トシテ總括セン事ヲ提案セリ。

入山氏ハ第 1 例トシテ 48 歳ノ男子ノ會厭軟骨舌面ニ於テ左舌會厭窩ニ近ク約小指頭大腎臟形ノ「アテローム」様囊腫ヲ認メ。第 2 例ハ 54 歳ノ男子ニテ會厭軟骨舌面ノ兩側舌會厭窩ニ接シ左右相對的ニ 2 個ノ小豆ヨリ稍々大ナル「アテローム」様囊腫ヲ見。右側ニ於テハ其外方ニ 2 個ノ小ナル圓形灰白色ノ單純ナル潑溜囊腫ヲ認メタ

リ。以上 2 例 3 個ノ「アテローム様チステ」ノ組織學的所見ハ殆ンド同様ニシテ囊腫壁ハ一般ニ肥厚シ。内外兩層ハ共ニ重層扁平上皮ヨリ成レ共。其内壁上皮ハ稍々廢退消失スルモノ多ク僅ニ其痕跡ヲ認ムルノミナリ。間質ハ多數ノ圓形細胞浸潤アリ結締組織中ニハ小血管多ク所々ニ粘液存在ス。淋巴濾胞ノ明ナルモノナク。囊腫壁ハ軟骨及ビ周圍トノ癒着等ナシ。氏ハ之等囊腫ノ成立機轉ヲ考案シ其外觀形狀、位置及ビ内容ノ鉛粥狀ニシテ「アテローム」内容ニ似タル點ハ Chiari ノ先天生成因ニヨル所謂「アテロームチステ」ヲ想像セシムルモ。其周圍特ニ軟骨トハ何等關係ナク。囊腫壁ハ肥厚シ且ツ圓形細胞ノ浸潤強ク。又内壁ノ重層扁平上皮ハ所々頽廢シテ僅カニ痕跡ヲ留メ。且ツ囊腫壁ニ多數ノ擴張セル粘液腺ヲ認ムル事等ハ Chiari ノ所謂「アテロームチステ」トハ其成因ヲ異ニセルモノトセリ。擴張セル粘液腺ヲ多數ニ見ル點及ビ第 2 例ニ於テハ單純ナル潑溜囊腫ノ附近ニ存在スル事實ハ寧ろ粘液腺ノ分泌障礙ニヨリ生ジタル一種ノ潑溜囊腫ナリト想像セリ。内容モ初メハ單純ナル粘液性又ハ漿液性ナリシナランモ。之ガ反覆セル慢性炎症刺激ノ爲メ變化ヲ蒙リ。遂ニ灰白色鉛粥狀トナルニ至レルモノトセリ。種村氏ハ内容「クリーム」様ニシテ内外層ハ重層扁平上皮ヨリナリ。中壁ニ多數ノ淋巴濾胞集簇ノ存スル點、腺組織ノ認メラズ。單房性ニシテ且ツ氈毛上皮。柱狀上皮及ビ移行上皮ハ之ヲ認メザリシモノヲ先天性トセリ。而シテ氏ハ從來先天性囊腫ノ壁中ニハ軟骨、骨、腺、筋肉、淋巴濾胞等ノ異常組織ヲ發見スル事屢々ナリト云フモ。斯カル異常組織ヲ發見スト雖モ異常組織ノ囊腫隣接組織トノ關係ヲ精細ニ究ム

ルニ非ザレバ往々ニシテ其診斷ヲ誤ル場合アルヲ指摘シ。此目的ニ對シテハ囊腫全壁就中、囊腫發生部ノ連續切片檢索ノ必要缺クベカラザルヲ強調セリ。Salmon ハ Louys =倣ヒ喉頭囊腫ヲ先天性ノモノトシテ鑑別スル標準ヲ其位置、形狀、內壁上皮ノ性質、壁中異常組織ヲ舉ゲタリ。滯溜囊腫ハ喉頭囊腫中其過半數ヲ占ムル事ハ學者ノ等シク認ムル所ナリ。而シテ喉頭ニ於テ粘液腺及ビ漿液腺ノ存スル限り其何處ニモ發生シ得ベキナリ。然ルニ先天性囊腫ハ胎生學上一定ノ位置ニ發生スルモノニシテ喉頭附近ニ生ズルモノトシテハ、頸部正中線及ビ側部囊腫ハ定型的ノモノナリ。胎生學的研究ニ依レバ喉頭及ビ氣管ハ Schlunddarm ノ彎入ニヨリ、會厭軟骨及ビ甲狀腺ハ Kiemengang ヨリ發生スト云フモ、斯カル先天性囊腫ト雖モ喉頭ハ甚ダ複雑ナル機轉ニヨリ形成セラル、ヲ以テ其途中迷入セル胚芽ニヨリ豫期セサル所ニ囊腫ヲ形成スルハ當然ナリ。

形狀ハ先天性ノモノハ不規則、廣キ基底ヲ以テ附着シ。滯溜囊腫ハ球形、柄ヲ以テ附着スル事多シト云フ。滯溜囊腫ハ粘膜中或ハ粘膜下ノ比較的淺キ腺或ハ腺管ヨリノ滯溜ニヨリ擴大セルニ反シ、先天性ノモノハ比較的深部ヨリ然モ囊腫自身ガ不規則成長ヲ有スト云フ。內壁上皮ノ性質ハ甚ダ興味深ク重要ナルモノニシテ一般ニ絨毛上皮、骰子狀上皮、扁平上皮、重層扁平上

皮等種々アリ。然モ斯カル上皮ハ順次移行シ得ル事ヲ考フレバ、上皮ノ種類ニヨリ囊腫ヲ決定スル事ハ容易ナラズ。然シナガラ滯溜囊腫ハ圓柱狀、骰子狀上皮多ク、所々ニ腺ノ分泌管ヲ證明シ得ベキナリ。而シテ壁ハ甚ダシキ肥厚ナク、内容ハ通常透明又ハ僅ニ濁濁スルノミニシテ、粘液性又ハ漿液性ナル事多シ。以上ノ諸點並ニ多クノ報告例ヨリ考案シ來レバ、余ノ症例ハ會厭軟骨舌面ヨリ發生セル先天性上皮囊腫ト思考スルガ適當ナリト信ズ。

結 論

1) 本例ハ 69 歳ノ高年者ノ會厭軟骨舌面ニ於テ其正中線ヨリ稍々左側ニ偏セル鳩卵大、橢圓形ノ巨大ナル囊腫ナリ。

2) 組織學的ニ囊腫壁ハ內、中、外ノ3層ヨリナリ。外層ハ共ニ厚キ重層扁平上皮ヨリナリ、中層ハ鬆粗ナル結締組織ニシテ、外層ニ近ク小血管ヲ認ムルモ、其他骨、軟骨、腺等ヲ認メザリキ。

3) 内容ハ帶黃灰白色ニシテ濃厚粘稠、稍々臭氣アル糜粥ニ類スル物質ニシテ、恰モ一様平等ナル「クリーム」様外觀ヲ呈シ、所謂「アテローム」様囊腫ナリ。

4) 本症例ハ Glas ノ所謂先天性會厭軟骨囊腫ト思惟スルガ妥等ナリト信ズ。

終リニ臨ミ、御懇篤ナル御校閲ヲ賜リタル
恩師阿久根教授ニ深甚ノ謝意ヲ表ス。

砂田論文附圖

會脈軟骨囊腫ニ就テ

Fig. 1.

第1圖 剔出セル腫瘍

Fig. 2.

第2圖 腫瘍壁組織學の所見

- a) 外層 (重層扁平上皮)
- b) 中層 (緻粗ナル結締織)
- c) 内層 (重層扁平上皮)

参 考 文 献

- 1) 金杉英五郎: 喉頭囊腫ノ2例。大日耳鼻。第6卷, 第1號, 1900. 2) 村山政之助: 巨大ナル喉頭囊腫ノ1例。大日耳鼻。第13卷, 1907. 3) 久保猪之吉: 會厭軟骨囊腫。實驗醫報。第3卷, 第36號, 1917. 4) 赤松純一: 本邦人ニ於ケル甲状腺殘胎ノ研究。大日耳鼻。第24卷, 1918. 5) 執行作彌: 先天性頸部正中線瘻孔。大日耳鼻。第24卷, 1918. 6) 黃玉階: 會厭軟骨「チステ」ノ1例。臺灣醫會誌。第219號, 1921. 7) 田上一忠: 會厭軟骨「チステ」ニ就テ。鐵西醫報。第192號, 1923. 8) 入山義夫: 會厭「アテローム様チステ」ニ就テ。大日耳鼻。第31卷, 1925. 9) 久保猪之吉: 巨大ナル會厭囊腫ノ手術法。大日耳鼻。第32卷, 1926. 10) 弘中英信: 巨大ナル會厭囊腫ノ1例。テラピー。第5卷, 1928. 11) 古城九州男: 披裂軟骨ヨリ發生セル喉頭囊腫。耳鼻。第3卷, 1930. 12) 柏村博之: 會厭軟骨囊腫。大日耳鼻。第36卷, 1930. 13) 光吉多喜男: 會厭軟骨ニ發生セル涎毛嚢柱上皮囊腫ニ就テ。大日耳鼻。第34卷, 1928. 14) 桑原夏一: 聲唇ノ先天性上皮囊腫ニ就テ。岡山醫會誌。第42卷, 1930. 15) 喜多島恒丸: 會厭軟骨囊腫ノ1例。大日耳鼻。第37卷, 1931. 16) 志水新次: 會厭軟骨上皮囊腫症例。耳鼻臨牀。第26卷, 1931. 17) 弘中英信。田久保茂樹: 二房性會厭軟骨囊腫ノ1例。大日耳鼻。第38卷, 1932. 18) 堀治部: 會厭囊腫ノ1例ニ就テ。大日耳鼻。第38卷, 1932. 19) 緒方周一。久野忠雄: 喉頭ニ發生セル囊腫ニ就テ。臺灣醫會誌。第31卷, 1932. 20) 山田喜郎: 喉頭囊腫ノ1症例。大日耳鼻。第38卷, 1932. 21) 弘中英信: 會厭軟骨ヨリ發生セル囊腫ニ就テ。大日耳鼻。第39卷, 1933. 22) 平田松太郎: 粉瘤様會厭囊腫症例。耳鼻。第6卷, 1933. 23) 上埜康廣: 會厭軟骨ニ發生セル「アテローム」様囊腫ノ1例。大日耳鼻。第40卷, 1934. 24) 高島藏: 會厭軟骨囊腫ニ就テ。耳鼻。第7卷, 1934. 25) 黒田顯: 聲唇囊腫ニ就テ。耳鼻。第7卷, 1934. 26) 崎基澤: 會厭軟骨囊腫ノ1例。耳鼻。第7卷, 1934. 27) 種村龍夫: 會厭囊腫ノ發生學的考察。耳鼻。第7卷, 1934. 28) 黒田顯: 聲帶上皮性囊腫ノ1例。阪醫事誌。第5卷, 1935. 29) 松井太郎: 會厭囊腫。阪醫事誌。第5卷, 1935. 30) 種村龍夫: 先天性會厭囊腫ノ1例。大日耳鼻。第41卷, 1935. 31) 高坂知甫: 大ナル會厭軟骨囊腫ノ1例。東京醫誌。第2953號, 1935. 32) Jurasz: Epiglottiscysten. Deutsch. med. Wochenschr. 1884. 33) Luschka: Über Kolloidcysten d. Kehlkopfes. Virchow Archiv. Bd. 52, 1871. 34) Beschorner: Über Epiglottiscysten. Berl. klin. Wschr. Bd. 14, 1877. 35) Ulrich: Über Kehlkopfcysten. Disseration, Würzburg. 1887. 36) Jurasz: Die gutartigen Neubildungen des Kehlkopfes. Heymann Handbuch Bd. 1, 1898. 37) Chiari: Über Cystenbildung in Stimmbindpolypen. W. klin. Wschr. Nr. 52. 1891. 38) Keller: Zur Kasuistik der Kehlkopfcysten. M. f. O. Bd. 14, 1899. 39) Grüber: Cystis retentionspare-epiglottica. Virchow Arch. Bd. 63, 1875. 40) Senator: Ein Fall von cystischen Tumpre d. Epiglottis. Deutsch. med. Wschr. Nr. 10, 1902. 41) Baumgarten: Zur Genese d. Epiglottiscyste. Arch. f. L. Bd. 17, 1905. 42) Glas: Über Larynxysten. A. f. L. u. R. Bd. 19, 1907. 43) Heymann: Beitrag zur Kenntnis des Epithels und der Drüsen des menschlichen Kehlkopfes in gesunden und kranken Zustand. Virchow Arch. Bd. 118, 1889. 44) Kahler: Ein Beitrag zur Genese d. Epiglottiscysten. A. f. L. u. R. Bd. 17, 1905. 45) Oppikoff: Zur Frage der Epiglottiscysten. A. f. L. Bd. 21, 1909. 46) Salmon: Über Larynxysten. Z. f. O. Bd. 62, 1911. 47) Schneider: Zur Genese der kongenitale Larynxysten. Z. f. O. Bd. 64, 1912. 48) Mischkin: Über Epiglottiscysten in Anschluss an E einer Fall. Z. f. L. u. R. Bd. 5, 1913. 49) M. Hajek: Seltene Kehlkopftumoren. Monatschr. f. O. Bd. 50, 1916. 50) Mason: Laryngeal cysts. Annals of O. Voll. 35, 1926. 51) Thost: Cysten des Kehlkopfes. Denker Handbuch. Bd. 5. 52) Amersbach: Kiemen-gangscyste des Larynx. Zblt. f. H. N. u. O. Bd. 23, 1934. 53) Myerson, Mervin C.: Cyste des Kehlkopfes. Zblt. f. H. N. u. O. Bd. 22, 1934. 54) Knapp, Erich: Eine Epithelcyste des Stimmbandes. Mschr. f. O. Bd. 69, 1935.